NY エッセイ 32

中瀬有紀

両輪を生きる



Summer in Central Park

1945年8月14日、日本はポツダム宣言の受託を決定し、16日に玉音放送で太平洋戦争における日本の降伏が国民に告げられてから68年、日本国民はずっとアメリカ合衆国を見つめ続けてきました。日本で生まれた私がアメリカの芸術に興味を持ち渡米したのも、一つはアメリカ経済が日本人である私の心にまで影響を及ぼしたからだと思います。

確かに、アメリカ経済が日本を含め世界の市場に及ぼす影響力は甚大です。ニューヨーク市場の動向が各国企業の株価を上下し、為替を変動させます。同じように舞台の世界でも、日本ではブロードウェイ作品の来日や輸入が頻繁に行われ、トニー賞の授賞式がニュースになるほどです。

しかし「好きな照明を仕事にしたい」と訓練を重ねていくと「好き」と感じていたものの真意が経済から受けた洗脳によるものなのかもしれない、という混乱に立ち向かう日がいつか必ずやってきます。特に「好き」なものが移行しつつあるとき、過去の自身の決断を正当化するために「好きだった」ことの理由を探し道に迷うのです。

それはきっと、芸術が金銭とは無関係のピュアなものだという勘違いが生む落とし穴でしょう。芸術もクライアントの要望に応える商売であることに変わりはなく、経済の影響を受けることは当たり前です。特に舞台芸術家は、出雲の阿国が河原乞食であったようにヒエラルキーの最下層に位置しますので、ふりかかる経済のあおりは尋常でありません。賤視される存在であることを自覚し、技を磨き、顧客に作品を買ってもらうための説得力と客観性を備え、覚悟を決めて芸をやり通す執念がないと成功しません。

今自分が何をすべきかを考え行動を決断するのは、経済力にかかわらず、常に自分でなければなりません。そしてその決断が自身の生きる意味という問いに応えるものでなければ「私」は「経済」にただ流される存在になってしまいます。しっかりと現実認識をした上で私が私らしく生きるには、なぜ自分は照明家なのか、なぜこの作品が世に必要なのか、なぜいま生きているのかという問いが必要です。それらの問いに常に応えようとすることにより、作品が研ぎ澄まされ、好きなことを仕事にする上で「好きだ」と思うことが経済の流れと共に変化していく自分に素直になれるでしょう。